
キチガイ達の日常

緑一色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キチガイ達の日常

【Nコード】

N7623V

【作者名】

緑一色

【あらすじ】

僕の通う高校にはキチガイが居ました。

そんな愛すべきキチガイ達と僕との友情だの何だの色々描いた作品です。

出会いは突然に

人間と言うのは本当に面白い。

突然だが、僕こと永井涼ながいりょうはそう思わざるを得なかった。

高校生活1日目。

僕の目の前に現れたのはキチガイだった。

愛知県のとある私立高校。

この辺りに住む中学生の殆どがこの高校を滑り止めとして受験する。

僕も勿論、ここを受験して見事合格した。

だが、所詮は滑り止め。

僕はこんな所に行くだなんて夢にも思っていなかった。

自慢じゃないが、内申点は悪くなかった。

中学校で行われている定期テスト、実力テストの類も上位をキープしていた。

僕は自分の学力に見合うであろう県立高校を受験した。

だが、緊張の所為からか見事に滑ってしまったのだ。

合格発表の時、何度も何度も受験番号105番を探したが見つからなかった。

僕の両親はどちらも教師をしており、この結果にひどく落胆していた。

兄は有名県立高校を出て、今は東京の大学で働いているというのに・・・という文句は何度聞いたことだろうか。

こうして僕は滑り止めとして受けた私立高校に行くことになった。

午前8時10分。

学校には40分までに来れば良かったので少しばかり早すぎたかと思っただが、そんな事も無かった。

僕のクラスの生徒数35人中のおよそ20人が既に教室内に居た。

僕が教室に入っても誰一人として話しかけようとしなない。

それは流石に高望みしすぎただろうか？

席に着いたらまず一番に教室全体を見渡した。

見知った顔は1人もいない。

まあ、当然と言えば当然だ。

一応、友人たちには僕が私立高校に行くことを報告したが、皆揃って一言目には僕に慰めの言葉をかけ、二言目には自分が県立高校に受かったことを自慢していた。

グルリと教室を見渡し、僕はふと一人の人物に目を留めた。

制服が男子の物だったので、自分と同性だということは分かった。

後姿しか見えないがそれだけで十分だった。

彼の背に貼りつけてあったのは今、小学生たちの間で人気のヒーローのシールだった。

そのシリーズは戦隊物として人気を集めており、小学3年生の弟も日曜日によく見ている。

確か………何とかピンクのシールである。

何故彼は赤、青、黒、緑、ピンクの中のピンクをチョイスした？

しかもそのシールはかなり大きい。

彼の背中を大部分をシールで隠してしまうほどに………。

これedyouやく合点がいった。

何故クラスメイトの何人かはある一点を凝視したまま動かなかったり、苦笑していたりしたのが。

そいつの隣に座っていた男子生徒が彼の頭を叩く。

「お前、何やってんの!？」

良い音がした。

彼は痛かったのか頭を摩りながら男子生徒に反論する。

「いや、こうした方が馬鹿っぽいだろ？」

これが僕の高校生活で初めて出来た友人でありキチガイでもある北きた川かわ信しん吾ごとの出会いだった。

自己紹介

北川はその後も自分の背中のシールを剥がすつもりはなく、しばらくそのままだったが、隣の男子生徒の攻撃に耐えきれず渋々シールを剥がしていた。

彼は最後の最後まで名残惜しそうにシールを眺めてゴミ箱へと捨てた。

そのやり取りを見ていると集合時刻の8時40分になり、担任が教室へと入ってきた。

読者の期待に応えられなくて申し訳ないが、担任は化粧の濃い年増の女だった。

僕の推測によると歳は50後半に近いと見た。

彼女は自分のことを宇野うのと名乗った。

宇野は自分の名前と簡単に入学式についての話をしてすぐに移動するよつに僕らに指示した。

入学式は体育館で行われるので僕は体育館シューズを持って体育館へと向かった。

僕が来てすぐに入学式は始まった。

ここで特筆すべき点はないので割愛させていただく。

入学式も終わり、本来ならこれで帰宅できるのだが今回は違った。

「では、皆との仲を深めるために自己紹介をしましょうか。
じゃあ出席番号順に1番の阿部あべさんからどうぞ」

ふざけるな。

僕はこんな所から早く抜け出したいというのに今度は自己紹介をし
ると言うのか。

出席番号1番の阿部さんだって嫌そうな顔している。

阿部さんは小さな声で素早く自己紹介を終えると、席へと戻って行った。

多分おとなしい子なのだろう。

これは余談だが、彼女はおそらく入学式前に髪を切りに行ったのだろうが見事に失敗しておりまるでちび〇るこちゃんみたいだった。

だが、僕が真に気にしていたのはそこじゃない。

勿論、あの男だ。

北川の1つ前の出席番号の北岡きたおかの自己紹介が終わり、ついに彼の番になった。

「じゃあ北川くんどうぞ」

北川の名前に僕は心のどこかで期待していた。

きっと彼はここでも何かやらかしてくれる。

それはもしかしたら担任の宇野を除く教室内の全ての人物が考えていたことだったのかもしれない。

北川は教卓の前に立ち、口を開いた。

「えー、〇〇中学校出身の北川真吾です。
中学では剣道部に入っていました。
特技はマジックです」

普通だ。

何故だ？

何故何も仕掛けてこない？

「好きな漫画は」

違う。

僕が知りたいのはそんな君のコアな情報じゃない。

期待外れだったか……。

僕は気だるそうに彼から目を逸らそうとした。

その時だった。

突如、北川の制服の上が破けた。

北川は両腕で思いっきり制服を破いたようだった。

「北〇の拳です！」

僕の中で誰かがY o uはショック！と叫んだような気がした。

わざわざ黒のマジックで胸に北斗七星まで描かれている。

彼は自分の身体で主人公を再現しようと思っていたのだろうが、如何せん彼の身体は少しばかり細すぎた。

何の前触れもなく教室内は爆笑の渦に包まれた。

当然、僕も彼のガリマッチョな体型に思わず吹き出してしまった。

だが、一人だけこの状況でも笑わなかった男がいた。

「どこぞの変態だ、手前は！」

北川の隣に座る男子生徒だ。

彼は立ち上がり、机の上に入り、北川の顔面に向かってドロップキックを繰り出した。

「北斗神拳はむておうぶっ!!」

多分北川は無敵だと言いたかったのだろう。

最もその言葉はドロップキックによって消されたが。

「痛……………何故先ほどから俺の邪魔を……………」

「何故なら俺はツッコミだから」

「適切な言い訳ありがとう。だが死ね」

「死なねえよ!バーカバーカ!!」

悪口のボキャブラリー少ないなこいつ。

その時、宇野が北川の腕を掴んで引きずっていった。

「え？ちよ、先生？俺、何か悪いことしましたっけ？」

「自己紹介中に脱ぐ生徒は一度保健室に連れて行かないといけませ
んね。」

その後病院に「

「いやいやいや、先生！これ俺の渾身のポケだから！本当に、ちよ、
違っ」

「あはははは、やっぱ馬鹿だ」

「たかの高野くん。」

貴方もよ。クラスメイトに突然ドロップキックするような子は放っ
ておけません」

宇野は左腕で北川の隣に座る男子生徒高野を掴んで引っ張って行っ
た。

「え……………マジ？」

どうでもいいけど宇野先生、力あるな。

その後、生徒指導室で仲良く怒られた高野と北川はそれがきっかけで仲良くなったらしい。

めでたしめでたし

自己紹介（後書き）

中々主人公とキチガイ達が絡まない（汗）

もう少しお待ちを

友達（前書き）

今回はちょっとシリマスです

友達

入学式から1週間が過ぎた。

クラスの皆は少しずつ団結していったようだ。

僕や北川や高野のような特例もまだ少しはあるが、すぐに皆1つにまとまるのだろう。

僕もその輪に入ればいいと思うだろうが、僕にとってここは負け犬の巢窟みたいなものだ。

実際、ここに来るのは県立高校の受験を滑ったやつばかりだ。

そんな負け犬同士で傷痕を舐めあつような友情関係を僕は作り上げたくない。

そもそも、中学時代の仲間たちと付き合い続けられればいいじゃないか。

何を考える必要がある？

そんなだから僕はいつも休み時間は一人、昼飯の時も一人、帰り道も一人。

とにかく一人だ。

だが、この状況が別に嫌という訳でもないからこれで良しなんだろう。

僕は今日この日一人で居たことを後悔することになった。

「だからよ、ここで生活する奴らは俺らに月謝払わないといけないんだよ。分かる？」

「ほら、今月分俺ら5人に一人2000円ずつで10000円な」

そう。

この私立高校は上は僕みたいな県立のトップクラスを狙える頭の良いのからこいつらみたいに風紀を乱すような頭の悪い屑まで十人十色なのである。

そして、帰りに一人で歩いているところを目をつけられて体育館裏に連れて行かれたのである。

「あんだ達、悪いけど僕は早く帰りたいんだよ。どいてくれ」

僕は出来る限り力強い口調で言い放った。

だが、屑たちは下卑た声で笑っただけだった。

一しきり笑い終えた屑の内の一人は僕の頬を殴った。

僕はコンクリートの地面に倒れこむ。

「年上にそんな口調で話しちゃ駄目だろ？僕ちゃん」

屑は笑いながら倒れこんでいる僕を蹴り続ける。

いつの間にか足が増えていっているような気がする。

だが、僕はこんな屑には屈したくない。

そんなことするくらいだったら抵抗してやる。

そう思っていた。

でも、浮かんできたのは諦めの道のみだった。

ここで僕の今持っている全財産を渡せばこいつらもきつと許してくれるだろうな。

そうすればもう痛いことはされないだろうな。

そんな考えが浮かぶ度に悔しくて涙が出てきた。

情けない自分に怒りまで沸いてきた。

屑たちは僕が涙を流してるのを見ると更に笑い声が大きくなった。

すると、突然僕への蹴りが止まった。

もう蹴られないのだろうか？

僕はそつと目を開け、体を起こした。

視線の先には僕のクラスメイトの北川と高野がいた。

僕を助けに来た？

普段の僕は人との関わりを拒否しているのにこんな時だけそんな都合の良い考えが浮かんだ。

屑の一人が声を発する。

「お前ら何見てんだよ」

高野がビクツと肩を震わせた。

だが、北川は薄く笑っているだけで何の反応も示さない。

「見世物じゃねえんだよ、帰れ」

「分かってますよ先輩方。この事は誰にも言いませんって」

北川のその言葉で僕の頭の中は真っ白になった。

「俺らは偶然、ここ通っただけなんで。そんな面倒事に巻き込まれたくないですし。」

どうぞどうぞ続けてください」

北川は今にも高笑いを上げそうな顔つきでそう言った。

それを聞くと屑たちは安心したようでさっきまでの不安そうな顔つきは消え、さっき僕から金をせびっていた時の締りのない笑みを見せた。

「ばいばい、永井。また明日」

北川と高野は僕に別れの挨拶をすると走ってそこから走り去っていった。

屑たちがまた僕の方を向く。

「残念だな。お友達に裏切られてよ」

「いや、こんな奴に友達いるわけねーだろ。大方、ただのクラスメイトだろ」

「ぎゃははは、悲しすぎだろお前の人生」

「俺同情しちゃうな、何ちって」

屑たちは僕に罵詈雑言を浴びせ始めた。

だが、僕は悲しくはない。

よく考えれば屑の一人が言ったように彼らはただのクラスメイトだ。

僕を助ける訳が無い。

やっぱり素直に金渡すかな……。

助けも来ないだろうし。

そう思うと、何だか笑えてきた。

「うわ、こいつ笑い始めたぞ」

「きめー。Mじゃねえの？」

「成る程な、じゃあもうちょい苛めてやる？」

「いや、もう金取って帰ろうぜ。その金でゲーセン行こうぜ」

どうやら僕のことを屑たちはまた蹴るようだ。

もう蹴られ過ぎて動くのもきついな。

きっと僕が完全に動かなくなったら僕の鞆に入っている財布を見つけて出してゲーセンに行くんだろうな。

さあ、覚悟は出来た。

僕のことを蹴ってみろよ。

その時、銀製のフォークが空を飛んだ。

「あぎゃああああっ!!」

多分、屑の一人の悲鳴だろう。

頑張って顔を横に向けてみると屑の目にさっき飛んでいたフォークが刺さっていた。

しかし、あのフォークはどこから飛んできたんだろうか。

「おい、大丈夫へっ!!」

「何だよ、お前りゃっ!!」

その後も「ぐえっ」「とか」「ぎゃっ」「とか屑のものと思われる悲鳴が聞こえた。

その間中僕は恐怖でずっと目を瞑っていた。

悲鳴が聞こえなくなって40秒くらい（もっと長かったかもしれない）で僕は目を開けてみた。

そこにはズタ袋を被って竹刀を持っている2人組がいた。

2人組は何か話しているようだ。

僕はそっと聞き耳を立てる。

「あー…………マジで死ぬかと思った」

「何言っただよ。俺の天才的頭脳による計算から導き出された完璧な作戦だ。失敗するわけがない」

「でも、こいつらどうすんだよ?」

「とりあえず服脱がして 女子高の前の橋にでも吊るしておこうぜ」

「鬼か!!」

「そんなことないだろ。そうでもしないと俺らの事血眼になって探すぜ。」

あ、その前にその件が噂になって学校来れないかもな。けけけ」

「……………やっぱ鬼じゃねえか」

「失礼な。Mr・品行方正とは俺のことだぜ?」

「そんなに性格悪い品行方正いてたまるか!」

この声は……………聞き覚えがあった。

僕は起き上がり、2人に声をかける。

「もしかしてきた」

「しーっ」

ズタ袋の1人が人差し指を口元に当てた。

僕は素直に言葉を切った。

「ここで俺らの名前出されるとこいつらに報復されかねないからな。場所変えようぜ」

その時、屑の一人が小さくうめき声を上げたのでその頭に竹刀が振り下ろされた。

僕は高校からの最寄駅のベンチに座った。

そこでズタ袋の2人はようやく顔を見せてくれた。

予想通り、2人の正体はクラスメイトであり一度僕を見捨てた北川と高野だった。

彼らが正体を明かすと僕は開口一番2人に尋ねた。

「何で……一度、僕を見捨てたのに助けに来たの？」

その質問に北川は意地悪く笑い、高野は嫌そうに僕から目を背けた。当然、答えたのは北川だった。

「いや、ああでも言わないとお前のこと助けられなかったからさ。どう考えても2対5じゃ分が悪いだろ？おまけに相手の方が体格もデカいときた。だから、最初の奇襲で相手の内最低でも一人に恐怖を植え付けないとまずいな〜って考えたわけよ。フオークで片目潰されりゃまともな思考が出来ないだろ？あとは相手に動く隙を与えないように素早く近づいて武器で潰す。俺、天才じゃね？てか天才だな」

事が終わると北川は本当によく喋る。

高野はそれに対してさっきから一言も口を利いてくれない。

「な、高野。

お前がいなかったら俺の天才的な作戦も成功しなかったんだし、感謝してるぜ」

「何が感謝してるだよ。

お前、自分でこの前あいつらに一人でいた時にカツアゲされたって言ってたじゃねえか。

体よく復讐の道具に俺と永井のこと使いやがって」

「あ！お前それは言わない約束だろ」

2人はまたいがみ合い始めた。

そんな2人を見ていると何だかおかしくなってきた。

僕もこの2人に交りたいとすら思ってきた。

だが、駄目だ。

僕は所詮、一人だ。

彼らだって僕を友達とすら思っていないんだろうな。

きっと高野の言う通り北川が復讐したかっただけなんだろう。

僕は彼らに背を向け、駅のホームへと向かって歩き出した。

「おい、どこ行くだよ永井」

高野の声が後ろから聞こえた。

僕は振り返らずに言葉を返す。

「帰るんだよ。」

あの肩どもに腹とか背中とか散々蹴られて痛いし」

「そんな釣れないこと言わず俺らと遊んでごっせー」

「……………え？」

高野の言葉に僕は足を止めた。

北川も同調する。

「そつだそつだ！折角なんだし、親睦会も含めてカラオケにでも行

「じゃ」

「お前、カラオケ一昨日も行ったじゃねえか」

「いいじゃん！カラオケはいつ行ったって楽しいもんだ。
永井、行くだろ？」

彼らは僕を助けたばかりか僕とカラオケに行こうとまで言うのか。

本当に馬鹿な奴らだ。

こんな弱くて負け犬な僕を遊びに誘うなんて彼らの頭を疑うな。

「僕は……」

その日、僕は初めて我が家の門限（7時30分までには帰宅）を破った。

部活決め

入学式から10日後。

この前の事件の後、例の不良たちは学校からパツタリと消えたという話を聞いた。

彼らの素行には教師やクラスメイトも迷惑していたし、願ったり叶ったりだったらしい。

北川はその話を嬉々として語っていた。

情報の出所は不明だがきつと聞かない方がいいだろう。

まあ、その話はさておき本日は部活決めの日だった。

とりあえず、僕は文化系の部活には入りたくない。

僕は中学時代、美術部に所属していた。

理由は正直言っただけだった。

ただ周りが部活に入っているから僕もと便乗しただけだった。

美術部は随分とひどかった。

アニメだの同人誌だの何だの僕みたいな一般人には到底着いて行けない話題だった。

という過去から僕はどうしても文化系はオタクの巣窟というイメージが拭い去れないのだ。

偏見と言うことは重々承知しているが、やはり一度持った印象と言っただけの中々薄れない。

というわけで今机に座って考え中なのである。

「永井くんは部活どうすんの？」

呑気に僕に声をかけてくるのは隣に席に座る真田唯^{まひだ ゆい}さん。

この人も北川に負けず劣らずかなりの変わり者だ。

それはこの10日間でよく分かった。

何というか、少し抜けているのである。

世の中ではこういうのを天然と呼ぶと高野が言っていた。

「まだ考え中」

「そかそか。それならハンドボール来なよ。楽しいよ」

「……確かハンド部って女子限定じゃなかったっけ？」

「あ、そうだった」

「本当に忘れてたの？」

「うん。すっかり」

「まあ、誘ってくれたのはありがとう」

「うん。どういたしまして」

真田さんはそれだけ言つとさっさと教室を出て行ってしまった。

未だ僕はこのクラスで真田さん、北川、高野の3人としか話したことが無い。

3人とも向こうから話しかけてきた。

僕に人を寄せ付ける何かがあるのだろうかと少し考えたが、結論は人じゃなくて変人を寄せ付ける何かがあるのだろうかということだった。

よく考えれば真田さんとは北川や高野よりも先に喋った。

といっても向こうが消しゴムを貸してほしいという要望による事務的な会話だったけど。

真田さんもいなくなり、ふと教室を見渡してみる。

もう教室に残っている人影は少ない。

まあ、放課後なのだから当たり前なのだが。

しかし、予想通りあの馬鹿2人は残っていた。

「……あ」

「よっしゃ月いただき！月見酒！50点」

何故か花札をしている。

ちなみに昨日はトランプでポーカーをしていた。

要するに彼らは賭博の類が好きなのだ。

しかし、どちらの勝負でも言えるのは北川にはギャンブルのセンスがないということだった。

「なあ、少しくらい手加減してくれよ」

「花札に手加減も何もないだろ！！完全にこれは運だつて」

「くそ、次こそは」

北川は威勢よく花札を切っていたが、手元が狂いカードが全て床に散らばる。

「うわっ、最悪だ」

「とつとと拾えよ」

そう言つて高野は北川の頭を踏みつける。

北川は一瞬、高野を睨んだがすぐに視線をカードに移す。

高野が僕に呼びかけてきた。

「なあ、まだ部活決まらねえの？」

「ごめん。待たせちゃって」

「いや、それは良いんだけど時間が無いんじゃないかねえの？今日は確か5時から職員会議だから早く決めないと渡しそびれるぞ」

時計に目をやれば4時43分。

確かにそろそろ決めなければまずい。

「どつどつどつか……」

焦るとどれが良いのか分からなくなってくる。

サッカー部、野球部、バスケット部、テニス部、剣道部、陸上部、水泳部、空手部、パルクール部。

ん？パルクールって何だ！？

すごい気になるけど下手な部活を選んだら危ないからこれは除外だ。

それでも残りは8つある。

北川も気になったのかこちらに目を向ける。

「お前、まだ部活選んでなかったの？何なら帰宅部にしまえよ」

「いや、それはちょっと」

流石に僕でも抵抗があった。

「なら一番単純そうなのにしるよ」

「単純………」

ここは北川に従うことにしよう。

僕は自慢じゃないがスポーツの類はてんで駄目だ。

よって残りは陸上と水泳。

「陸上って走ればいいだけだよな」

「まあ、そうだけど」

「じゃあそれだ！ー！そう、君は今日から陸上部の死兆星、永井涼だ」

「！」

「演技悪い星だな……」

だが、確かに陸上って走れば良いだけだしな。

僕は陸上部に丸を付けた。

我ながら安直な決め方だな。

と、今更思ってみても遅いが。

こうして僕は陸上部に入ることを決めた。

「てか、北川は部活どうしたんだよ？」

「俺は剣道！高野もな！」

ああ、だからこの前竹刀を……。

初部活

本日は日曜日、快晴なり。

だが、中学時代のゆるい美術部とは違い、陸上部は日曜日だろうと何だろうと部活はあるのである。

ちなみに、この前部活を決めたのが金曜日で翌日の土曜日は部活は休みだった。

そして、僕は今グラウンドの隅の辺りに立っている。

目の前にはアップがてら走っている生徒達がちらほらといる。

僕は部活初日から遅刻してしまった。

「これは気まずいな……」

流石に初日から遅刻とは僕もついてない。

生意気だ、とか言われて苛められたりしないよな？

……まあ、初日をサボるよりはマシだろう。

とりあえず、グラウンドの中心へと僕は歩いていく。

途中、グラウンドを走っている同じ陸上部（おそらく先輩だと思われる）から露骨に怪訝な視線を受け、少し気が滅入った。

僕が話しかける前にグラウンドの中心にいた顧問らしき男性教師が話しかけてきた。

「君が最後の1人か？」

やはり僕以外の1年生は皆既に来ていたようだ。

当たり前だが。

しかし、この男性教師は随分と珍妙な格好をしている。

白衣に身を包み、黒縁の眼鏡を掛けており、陸上部より科学部の顧問のような感じだ。

陸上部の顧問と言うのでつきり熱血の体育会系を想像していたが、この男は随分と面倒くさそうにこちらを見やっている。

「はい、遅れてすみません。永井涼です」

「うん。僕は顧問の今田達也^{いまだ たつや}。よろしく」

今田はそう言ってその場に座り込んだ。

僕も座るべきかと考えている内にタイミングを逃してしまい、結局立ったまま話を聞くことにした。

「何から話せば良いんだったかな……。とりあえず、部長
呼ぶか。」

おい、高峰たかみねー」

この人本当に大丈夫なのだろうか。

何というか責任感を感じてなさそうだ。

高峰と呼ばれたユニフォーム姿で走っていた男はすぐに今田の元へ
と走ってきた。

やっぱり陸上部は足早いな、と当たり前のことを考えてしまった。

「どうしました！？あ、彼が最後の1人ですか！！」

高峰部長は大声で今田に尋ねる。

顧問とは対照的に部長は熱血体育会系だな。

「そろそろ。で、何話せばいい？」

「分かりました！！彼には自分が説明しておきます！！！」

「はい、よろしくー」

今田は高峰に責任の全てを押し付け、自分はグラウンドに寝転がった。

白衣、汚れても良いのだろうか？

「やあ、君が永井君だね！！」

部長のフレンドリーな雰囲気は良いのだが、如何せん声大きい。

耳元で騒ぐな！！

って一瞬叫びたくなった。

「はい、今日は遅刻してしまつてすいません」

「そうだな、確かに遅刻は悪いがちゃんと部活に来たことは評価しようー!」

「むしろちゃんと来ない奴もいるんですか?」

「まあな!君と同じ1年生に1人いるな!」

「でも、部活つて今日からじゃないんですか?」

「いや、そいつは走るのが早いから勝手に自分が拉致して部活に無理やり入れさせたから反発するのも当然と言えば当然だがな!!はははは!!--!」

僕の質問に答えてないぞ、おい。

「で、部活は今日からですよね?そいつはその前から部活してたんですか?」

「そうそう！君はランニングウェアみたいなの持ってる？自分は大会が近いから士気を上げる為にこのユニフォームで走ってるんだが、普通はこういうのは無しだから気をつける！！」

あと部員は君も含めて1年生は男女合わせて5人、2年生は4人、3年生は2人だ！」

「はい、じゃあ用意しておきます。で、そいつはいつから部活をしてたんですか？」

「そうだな。この部活は基本毎日あるからランニングウェアは2、3着買った方がいいぞ！！」

「あ、分かりました。ありがとうございます。で、そいつはもしかして経験者なんですか？」

「じゃあ、最初だし他の1年生と同じように外周行ってみようか！今日1日で15周してもらおうよ！」

あ、ただし5周ごとに10分の休憩入れていいから！！」

「分かりました。頑張ります。ところで先輩の好きな食べ物は何？」

「プリンアラモードが大好きだ！！」

何でそれは素直に答えんだよ!!

てか、かわいらしいな。

まあ、このまま聞いてても多分きちんとした答えは返ってこないだろうしとりあえず先輩の言うとおり走りに行くでしょう。

それにしても部長の一人称“自分”か……。

珍しいな。

「つ………疲れた」

何とか15周走り終えた。

流石に元・美術部がいきなり走るといのはきつかったか。

時計を見ればもう12時前だ。

今日の部活は午前中のみなので、これで多分今日のメニューは終わりだろう。

僕の場合は遅刻してきたので周りに追いつくために必死になって走ったので他より倍は疲れた。

「やあ！！お疲れ様！！」

そうやって僕の肩に手を置いて耳元で大声を出す輩は今日知った限り、1人しかいない。

「部長も、お疲れ様です……………」

「疲れてるな！！まあ、当然か！！
我が高校では『人殺し』と呼ばれる外周を耐えきったのだから！！
根性あるな、君！！」

人殺してもうそんな名前付く程ならその練習禁止させましょうよ。

「実際、このメニューを1年生でクリアしたのは君だけだからな！！
！驚きだ！！」

え？僕だけ……………？

他の奴が先に終わったってわけじゃなかったのか。

てか、自分だけと分かると嬉しくなってくるな。

思わずニヤけてしまう。

「ん？」

ふと僕の視界に見知った顔が映った。

確か僕と同じクラスの小西こにしとか言ったか。

陸上部の部室から小西は出てきた、ということはあいつも陸上部だったのか。

その日、僕は彼のことを同じ部活なら仲良く出来そうだな程度にしか思っていなかった。

この小西こそがこの後起こるイベントの重要な鍵を握る人物だった
とは僕には未だに信じられない。

班決め

僕の通う学校には遠足なるものがある。

これは各学年全て1年に1回ある。

内容は小学生の頃行ったようなあの遠足とほとんど同じと言ってもいい。

一応、毎年行き先を変えたりしているらしいが、誰も彼もそんなに期待していない。

まあ、授業が潰れるという意味では良いことでもある。

そして、本日はその班決めなのである。

担任の宇野は5人組の班を作るように言った。

「永井く、組もうぜ!！」

「しかし、俺らって本当に友達少ないな。あと2人集まるのか?」

そう言っつて高野は笑っているが、僕としてはどうでも良かった。

この2人さえ居れば何とか楽しめるだろうという考えを持っていたからである。

他のクラスの面子を見てみると、皆まとまっている。

僕らと他の地味な生徒のみが余っておろしている。

しかし、僕らはその中でも余り慌てている素振りは見せていない。

「さあ、早く余った奴ら来い!!」

北川は自虐的にそう叫んでいる。

クラスの皆も既にこの男のこういう態度には慣れているので無視している。

全くもってどうしてこんな風に育ってしまったんだろう……。

「ねえ、なっがいくーん」

「ん？どうしたの、真田さん」

真田さんは妙にニコニコしながら僕に話しかけてきた。

まさか、余り者の僕を笑いに来たのだろうか？

と、一瞬そんな考えが浮かんだが、真田さんはそんな人じゃない。

僕の観察眼が正しければ。

「実はさ、そっちの仲間に入れてくれないかな？」

「え？真田さん、他の女子と一緒に行くんじゃないの？」

ちなみに他のクラスはどうか知らないけど、僕のクラスは班は綺麗に男女の区別がされていた。

その為、真田さんがそんなことを言い出すとは驚きだった。

こう見えて真田さんは友達が多いので、てっきり既に班は出来ているものだと思っていた。

真田さんはため息をつき、残念そうに返答する。

「それがさー、私の仲良い友達はこのクラスに5人ほどいるんだけ

ど、私も加えたら6人じゃん？
だから私は抜けてきたって訳です」

「……………ちょっと待って、自分から抜けてきたの？」

「うん。そうすれば5人で班が出来て私以外の5人は幸せハッピーだし」

「真田さんは幸せじゃなくて良かったの？」

聞き終わってからこの質問は失敗だったと僕は後悔した。

わざわざ真田さんを責める必要は無いじゃないか。

だが、真田さんはけろっとした顔をしている。

「ううん。永井くんたちの班に入れてもらえば私もハッピーだよ」

「良いけど、僕の班は皆男だしまだ1人足りないよ？」

「大丈夫だよ、それくらい。余裕のよっちゃんだよ」

別に余裕では無いと思うが……。

「まあ、北川と高野に聞いてみるよ」

僕は一度、真田さんの元を離れ、北川と高野の所へと向かった。

「2人ともちよつと良い？」

「ん？何だよ、今良いところなんだよ」

北川は漫画本を読みながら面倒くさそうに僕に返答した。

彼が漫画本を読んでいる時は大抵拗ねている時だ。

多分、そこに散らばっているトランプを見る限りまた高野に負けたんだろ。

てか、この短時間で負けるって凄いな。

「真田さんも僕らの班にも入れてもいい？」

「ん？真田って真田唯のことか？」

北川は興味を持ったのか漫画本から顔を上げた。

高野も僕に目を向けてくる。

「そうだけど。駄目かな？」

高野は真剣に考えているが、北川は即答した。

「別に良いんじゃない？俺らの間にも新しい風を吹かせようじゃないか」

「そう？なら良かったよ。じゃあ、早速真田さんに」

「いや、待った」

高野は僕の腕を掴んで、僕の動きを止めた。

高野はそのまま言葉を続ける。

「突然、俺らに近づいてくるなんておかしいとは思わないか？」

「いや、僕は入学当初から真田さんと仲良いけど」

「そこだよ。そもそも何故お前に話しかけた？」

「いや、消しゴムを貸してあげ」

「その消しゴムを忘れてきたと言ったことすら彼女の計算だったとしたら？」

そして、このイベントを利用した何か大きな、そう殺人事件を起こそうとしてるんじゃないか!？」

そこには時刻表を利用したアリバイ確保や巧妙な死体入れ替えトリックや密室殺人等の数々の罠が仕掛けられているんじゃないか!？」

何だ、こいつ……。。。

いつもの高野とはまるで別人だ。

何か変な事言い出すし、一体何なんだ？

すると、北川が僕にそつと耳打ちした。

「あいつ、シャイなんだよ。まだ一度もクラスの女と話したこと無いらしい。」
「というより話せないんだと」

「え!?!高1でそんな奴いるの!?!」

僕はわざと大声でそう言った。

高野が北川を睨みつける。

「おい、北川……永井に何吹き込んだ？」

「え？いや、そのだね……。うん、まあ落ち着こつよ」

どうやらまた北川と高野で一悶着ありそつだ。

ならば、今のうちに。

「真田さん、OKだつてさ」

「あ、そつ？ありがとねー」

あの2人が暴れている間に班員の欄に真田さんの名前を書き込み、もう1人適当に僕が誰か連れて来よう。

最近、あの2人の扱いが少しずつだが分かってきた。

高野は切れやすいから慣れると簡単に扱えて楽だ。

問題はもう1人だな。

さて、どうしよう。

「あ、小西」

小西は隅の席で1人読書をしていた。

こんなことには興味無いと言う顔をしていた。

しかし、小西は呼びかけたのに聞こえていないのか無反応だ。

仕方ないので小西の肩を軽く叩く。

小西はよつやく振り向いた。

「何？」

「君はもう班決まった？」

「………まだ」

「なら僕らのところに来なよ。1人足りないんだよ、班員が」

「でも………迷惑に、ならない、か？」

「なるわけないよ。」

僕以外にも変な奴ばっかだけど、まあ仲良くしような」

「うん」

これで5人。

さて、後はあいつらが気付く前にこれを宇野先生に出そう。

「先生、班員決まりました」

「はい、分かりました。……随分と個性的なメンバーですね」

そんなこと口に出しちゃいけないんじゃないのか、教師が。

「素直に地味って言っていていいですよ」

「いや、地味なのは君くらいのものよ」

それは口に出してほしくなかった。

遠足3日前

遠足まであと3日。

僕はこの歳で少しわくわくしていたりする。

これはおかしい事か？と、ちょうど疑問に思っていたところだったが。

昼休みになってそれは僕だけではないことが分かった。

「遠足まであと3日あああ！！」

「うるせーよ」

そこには僕がいつも見ている風景が広がっていました。

北川が叫び、高野がツッコミを入れる。

高野のツッコミは色々な意味で鋭いので見ているだけで飽きない。

そして、北川の反応も多種多様なのでやはり飽きない。

今日の高野のツッコミは案外オーソドックスな脳天へのチョップだった。

北川の頭にめり込んだのではないかと思うほどの鋭さだった。

その北川も豚のような鳴き声を発してその場にうずくまる。

これだけで、昼休みは十分乗り切れる。

話が逸れたが、要するに僕が言いたいのはいくとも僕の愉快的な仲間達も同じ気持ちということだ。

彼らもこういつやり取りをすることによって退屈を紛らわしているのだ。

高野もツッコミを入れてはいるもの多分同じ気持ちだろう。

「永井い……………包帯」

「持つてるわけないだろ、そんなに都合良く」

高野くん、その読みは外れだ。

「持つてるよ。2mちょいだけど」

「おい!?!何で持つてんの!?!」

「いや、習慣になってるから」

「お前の習慣って何なんだよ一体」

高野の言い分は後で聞くとしてとりあえず、北川に包帯を手渡す。

包帯を受け取った北川はそれを自分で頭に巻きつけ始める。

しばらく高野と2人で北川を黙って見ていたら北川は予想通りの行動をした。

77

「ミイラ男!!」

北川は目だけ出して顔の全体を包帯で覆った。

しかし、予想通り過ぎて逆につまらない。

「もうちょい捻ってくれよ。つまらん」

今回はかりは高野に同意だ。

「えーと、マミー!」

「誰も飲み物の話はしてない」

「シシオさん!」

「誰も漫画の話はしてない」

「魔美夫さん!」

「誰だよ。混ぜるな。てか字怖いな」

字ってどういふことだ？

高野はたまに訳の分からないことを言う。

その時、教室中にアニメの主題歌にもなった名曲その〇かすの着メロ

が流れた。

教室は水を打ったように静まり返る。

誰だ？

そもそも学校に居る時は携帯電話の電源を切るのが規則のはずだが。

まあ、そんなルール守っている輩は中々いないのが現実だ。

だからといって、マナーモードにすらしていないというのは驚きだ。

しかし、いつもの流れから行くときっとこの男のはず。

さあ、早く携帯を手を取れ。

「はい、もしもし真田です」

お前かよー!!

「うん、元気だよ。……猫は流石に無理でしょ。まだインコとかならいける気がするけど。」

「……うん。分かった。醤油とバターね。じゃあ、日曜日に」

そう言って真田さんは電話を切った。

まさか、この人がオチを持つてくとは意外だ。

それにしても……。

この人、インコと醤油とバターで何するつもりなんだ……。

遠足3日前（後書き）

いろいろほのぼのした話も少しずつ入れていこうと思います

遠足前夜

「酒だ酒、酒持ってこい！！」

北川が悪乗りしてそんな事を言っているが無視だ。

そもそも未成年の飲酒は禁止だろう。

何故こんな事になってしまったのだろうか。

「ついに明日だな、遠足」

目を輝かせながら北川はそう言う。

「テンション上がりすぎだろ、馬鹿が」

呆れた表情で高野は返す。

「と、言いつつニヤニヤしながら一心不乱に遠足のしおり見てたのは誰だっけ？」

「ちよっ！！」

永井お前、見てたのか！？」

「そりゃ2人とも席は僕よりも教卓に近いからね。君らの授業中の行動はすぐに分かるよ」

まあ、こんな冷静な態度の僕も内心楽しみなのだが。

そんな事は口に出さない。

今日の授業も終わり、今は放課後。

僕は学校が終わっても教室に残ってダラダラしている。

流石に遠足前日は陸上部も休みだったので、久しぶりにここできつくりしている。

勿論、剣道部も今日ばかりは休みだ。

北川と高野はと言うと、いつも遅れてノコノコ部活に行くらしいのでいつもの事だが僕にとってはこの時間は久しぶりだ。

本人たち曰く

「剣道より大切な時間。それがここにある」

らしい。

「そう言えば永井、お前どこに住んでんの？」

「唐突な質問だね」

北川はたまにこんな風に脈絡の無い事を言う。

流石キチガイ。

僕はこの高校から4駅先で降り、そこから徒歩5分で自宅に着く。

その旨を伝えた瞬間、北川の目が輝いた。

ああ、絶対何か変な事考えてるな。

「で、そう言う北川は何処に？」

「ああ、俺は5駅行ったところで乗換してそこからまた2駅行ったところで降りる。あとは自転車で7分ちよい行ったところ」

「ちなみに俺は5駅行ったところまでは北川と一緒にだけど、そこで降りて徒歩2分の位置に」

「お前は聞いてないからどうでもいいや」

高野は目に見えて落ち込んでいる。

思いもよらぬ北川の反撃に驚いてもいるようにも見えた。

そして、北川は一度手を叩くと大声で宣言した。

「よっしゃ、今日は永井の家に泊まるぞー!」

「え?」

何言ってるんだ、こいつ。

「高野、準備する為一回帰るぞ」

北川は狼狽している高野を引っ張って、素早く教室から出て行ってしまった。

「ちょ、ちょっと待てよ!!」

僕も急いで教室から出て北川を追う。

足の速さならあいつらに負けない。

しかし、廊下には猫の子一匹いなかった。

「あいつら、こういう時は逃げ足早いな……」

実際は逃げたと見せかけて隣の教室に潜んでいたのが真相だったと後で聞かされた。

こうして僕の家泊まる準備を持ってきた北川達を無下に帰す訳にも行かず、彼らを泊める事にしたのだ。

今日は父親が居なくて本当に良かった。

母親は比較的、こういうことには融通が利くのだが、父親は違う。

中2の時に我が家で9時まで遊んでいた友人に鉄拳制裁を加えたのには驚いた。

その日以来、我が家に来る友人たちは6時には帰って行った。

風呂からも上がり、夕飯も食べ、そして現在に至る。

「なあ酒まだー？」

「酒なんて出せないよー!!」

僕が一喝しても北川はへらへらしてる。

「そついでば、高野はどーして？」

「そこで読書してるが？」

僕が部屋の隅を見てみると、高野は北川の言う通り読書をしていた。

本の背表紙だけで推測してみると、若者に今流行の小説らしい。

帯には出版から半年で早くも文庫化！！

等と銘打っているが、流石に半年は早すぎないか？

「高野にはおとなしい趣味だね」

「だろ？俺も思ったぜ」

北川はそう言ってビールの缶を開け、口を付けた。

「……ビール？」

「え、それどこから！？」

「俺の鞆から。やっぱ温いなー不味い」

僕は北川からビールを取り上げ、2階から放り捨てた。

「ああ！俺のビール！！」

「これでー安心かな」

「へ、残念だったな俺の鞆にはまだまだビールが沢山あるのさ！！」

北川はそう言って鞆の中の大量のビール缶を見せた。

僕はその鞆を北川と取り合う。

高野はその争いに参加せず一人読書続ける。

こうして僕らの遠足前夜はゆっくりと過ぎ去って行った。

ちなみに床に就いたのは2時過ぎだった。

寝不足確定です。

バス

おはようございまーす。

僕らは適当に宇野への挨拶を済ませると、すぐにバスに乗り込んだ。
狙うは最後列。

幸いまだ誰も来ていない。

「席ゲット!!」

北川が高らかに叫ぶ。

僕も便乗して思わず叫びたくなったけど我慢だ。

キチガイは一人で十分だ。

ふと高野の方を見てみると彼も僕と同じ安心しきった表情で座っていた。

何故僕らがこんなにも最後列の席に固執していたかということそれには理由がある。

僕らは断言するならばクラス内で浮いている。

色々な意味で、だ。

そして、これには今回の遠足の班員の数も関係してくる。

僕らの班は計5人の班だ。

5人という事はどう座っても1人余ってしまうのだ。

補助席を使うという案も考えられたが、バスによっては補助席が無い場合もある。

ふと見ればこのバスには補助席があったが、万が一の事を考えて僕は一番に学校に来た。

きっと北川や真田さんなら例え一人余っても上手くやっていけるだろうが、僕や高野はそうはいかない。

恐らく一言も喋れずに気まずい雰囲気を作り上げてしまっただろう。

と、この様に僕らは1人だけ余るという状況を作り上げない為に早く学校に来て最後列の5人席をキープしておいたのだ。

ちなみに席順は左から順に高野、北川、僕と言う順で並んでいる。

「あれ？早いね、3人とも」

真田さんがそう言いながらこっちに来た。

そうは言っても彼女は実質4番目に来たということになる。

十分彼女も早く来ている。

「ああ、ちよつと色々あってね」

「ふーん」

真田さんは僕の隣へと座った。

彼女が座った瞬間、高野がビクツと震えた。

それを見た北川が高野にちよつかいを出し始める。

その様子を僕と真田さんは笑って見ていた。

それから15分もするとクラスメイトはほぼ全員席に着いていた。

「小西の奴、遅いな……………」

と、北川がぼやいていた。

確かに遅い。

集合時間は8時30分なのだが、8時25分になった今ですらまだ居ないとは少し心配になってくる。

僕が宇野にその旨を伝えようと立ち上がりかけた時、ひどくゆっくりにした足取りで小西は現れた。

遅刻ギリギリだというのに全く急ぐ様子を見せていない。

それは彼の精一杯の照れ隠しだったのか、それとも元がそうなのか。

後になって分かった。

「おっはよー、小西くん」

真田さんは元気に挨拶するが、小西は無言で真田さんの右、つまり窓際の席に座った。

真田さんは少し顔をしかめたが、すぐに表情を戻した。

「では、全員揃った様ですので出発しようと思います」

宇野はそう始めて諸注意等を機械的に述べた。

だが、僕の耳には全く入ってこなかった。

聞き流した訳ではなかったのだが、バスが動き出す頃には彼女の話などすっかり忘れていた。

遠足のバスというものは五月蠅くなるのが定石だ。

むしろ目的地まで行儀よく静かに向かう等と言つのはもはや遠足ではない。

しかし、これは少しばかり五月蠅過ぎる気がする。

ジャラジャラという何かを転がすような音。

その後は一定間隔でトン……トンと何かを積み上げるような音。

僕には耐えきれなかった。

「ねえ」

「ん？どした？永井もやるか？」

この音の発生源の北川が呑気にそう尋ねる。

「そつだそつだ。こつこつというのは覚えておいて損は無いらちろつぜ」
高野も便乗する。

「永井くんも教えてあげるからちろつよ。次、変わってあげるから」

真田さんまでこれをするとは正直意外だった。

そう。

彼らはこの狭い車内で麻雀をしているのだ。

こつこつ所でやるなら普通トランプでは無いのだろうか？

そう思って僕は鞆にこつそりトランプを忍ばせてきた。

しかし、北川が出したのは雀卓。

高野が出したのは麻雀パイだった。

それに真田さんも参加したという次第だった。

当然、こんな事したら宇野に怒られるだろうと思っていたが、その宇野までこのゲームに参加しているのだ。

「ツモ。」

リーチ、ツモ、一発、ドラ3、断タンヤオ公九。跳満」

「ちょ、先生強すぎですよ」

教師ともあるはずの者が参加して良い物なのだろうか？

きつと駄目だろう。

だが、注意したところで結果は目に見えている。

それでも言わなければならぬと僕は思った。

「先生」

「どうしました？吐くの？漏らすの？それとも戻すの？」

「1個目と3個目意味同じですよ。てか、何で選択肢がその3つな
んですか。
えーっと、教員ともあるう方が麻雀なんかしてても良いのしょう
か？」

「教員が麻雀しちゃいけないって法律でもあるの？
いつ決めたの？何年何月何日何時何分何秒地球が何回回った時？」

「子供か!!！」

「あ、先生にそんな口利いちゃいけないんだー」

「やっぱ子供か!!！
てか、その歳でそんな子供みたいな事言つとちよつと不気味なんで
やめてください!!！」

宇野は僕の目の前に来ると腹に一発入れた。

鳩尾を的確に突いてきた。

「うほ……………」

宇野は用事が済むとまた雀卓へと戻って行った。

まさか、教師が生徒に手をあげるとは……………。

訴えてやる!!

……………多分なんだかんだで負けるんだろうな。

うづくまる僕の背中をそつと摩ってくれる天使のような者が突如現れた。

「大丈夫……………か？」

その声には聞き覚えがあった。

小西だった。

「ああ………ありがとう」

「痛そう………だ、な」

「まあ、年の功ってというか威力が凄まじかったよ」

僕は弱々しく？サインを小西に見せる。

すると、小西は少し微笑んだ。

「お、小西が笑ったとこ初めて見たかも」

僕がそう冗談交じりに言うと小西はすぐに笑みを絶やした。

だが、僕ははっきりと彼の笑顔を見た。

普段は無表情で何を考えているかも分からない彼の笑顔を。

「なあ、暇ならオオカマキリにでもついて語ろうか」

「ひどく………コアな、話題、じゃ、ね？」

僕の冗談にも彼はおぼろげながら笑ってくれた。

僕は残りの時間を彼と話すことで乗り切った。

山

バスに揺られて1時間弱。

遠足の目的地である山に着いた。

バスから見えるこの山の姿も美しかったが、降りてから見た山の姿はまた違った。

深い緑色に染められた山は一種の異様な不気味さも同時に漂わせていたが、僕は全く気にならなかった。

今思えばこの山は僕らが来るのを拒んでいたのではないかとまで思う。

後から調べたところここには昔、飛行機が墜落したこともあり、僕らは見なかったが何と墓まであったそうだ。

そんな場所に遠足に来させる学校側もどうかしていたのだろう。

実際、その日の天気は雨でも降りそうな曇り空だった。

最後まで雨は降ることは無かったが、それでもこの天気僕の興奮を冷ましたのも事実だった。

「で、これから何すんだ？」

北川が呑気に僕に尋ねる。

僕は黙って遠足のしおりの3ページを見せる。

北川はそれを見て、また頬を緩ませた。

「ウォークラリーって何か良く分からないけど面白そうだ！」

北川の興奮は天気が悪いことくらいで冷めないようで、キラキラと目を輝かせながら山を見つめている。

今にも山に向かって走り出しそうである。

僕と高野はさりげなく彼の近くで監視することにした。

その心配は流石に杞憂だったが、あの時はこいつならしでかしかねないと僕も高野も思っていた。

バスを降りてすぐに宇野は今回の遠足の説明を始めた。

宇野の説明を要約すると、つまりはこういうことだった。

班で別れてウォークラリーを行う。

ウォークラリーとはコース図にしたがって課題を解決しながらグループで歩き、時間得点と課題得点を競うスポーツらしい。

僕らもそのルールに従って、この山を班に分かれて歩き、全部で5つの隠された問題を探し出し、それを解き、ゴールするといったものだった。

「では、解散」

宇野がそう言つと一斉に他の班は山へと走り出した。

慌てて北川に目をやる。

「離せ！離せよ！」

「離すか、馬鹿」

良かった。

高野が既に捕まえていた。

「俺を、山に、行かせろ！」

「とりあえず落ち着きなよ」

僕は北川のバッグからスポーツ飲料の入ったペットボトルを出し、北川の口に無理やりねじ込む。

北川はとりあえずおとなしくなった。

そこで残りのメンバーを確認する。

真田さんもいる、小西もちゃんと残っていた。

真田さんは相も変わらず北川の表情の七変化を見て笑っている。

小西も同じようにこちらを見て少し笑みを浮かべているようだった。

ようやく落ち着きを取り戻した北川が深いため息を一つして、仕切りだす。

「では、我々も向かうとするか。山に――！」

「おう――！」

真田さんが元気に声を張り上げる。

だが、元気なのは彼女だけで僕も含めた北川以外の男子勢は暗い返事をした。

山を歩きながら僕らはとりとめもない話をしていた。

「ねえねえ、皆に聞きたいんだけど」

話を切り出したのは真田さんだった。

皆、適当に相槌を打つ。

「熊が出てきたらどうすんの？」

真っ先に答えたのは北川だった。

「やっつける!!」

皆、言葉を失った。

そして、何事もなかったかのように僕は答えた。

「死んだふりが良いって聞くけど、どうなんだろうね」

「それって確か迷信なんだろう？とりあえず走って逃げれば良いんじ

「やね？」

「でもでも、熊って鈍そうなイメージあるけど鮭取る時、早いよね〜
パーンって」

真田さんは腕を大袈裟に振るう。

「なあ、俺の倒すって案は？」

「問題は走るのが速いかだよね」

「うーん、それは遅そうな気もするけどね〜」

「俺の倒すって」

「それなら猪はどうなんだ？」

「猪ってどんなのだったっけ？」

「豚をパワーアップした……みたいな感じ？」

僕の説明に真田さんは大声で笑い始めた。

「やっぱ、永井くんって面白いね」

「そんなことないよ。」

てか、高野普通に女子と話せてるね」

「あ？そう言えばそうだな。真田、お前本当に女か？」

「ちよ、高野くんそれはひどくない！？」

僕らは盛大に笑った。

「でさ、俺なら猪は多分倒せ」

「小西、お前も話の輪に入ってこいよ」

「俺・・・・・・・・ちゃんと話せそうにない」

「大丈夫だよ。私は気にしないからさ」

「見て見て、これ毒蛇じゃね！？俺、噛まれ」

「小西は熊出てきたらどうする？」

「・・・・・・・・倒す」

僕らは大声で笑った。

「なあ、それ俺が最初に言」

「小西、お前面白いな！」

高野は小西の肩を強引に組んだ。

「おい………なんだよ皆。俺、グレるぞ」

「あ、あれが最初の問題じゃない？」

真田さんは木の枝に掛かっている箱を指差した。

「お、あれが問題か」

高野は走って箱を見に行った。

少し遅れて僕らも箱の前に辿り着いた。

高野は声に出して問題を読み始めた。

「えーと、問題1.この山には妖精さんがいます。その妖精さんの持つ飲み物は何でしょう？
は？妖精？」

僕は辺りを見渡す。

勿論だが、妖精なんかいない。

その時、北川が声を上げた。

「おい、妖精いたぞ！！」

僕は振り返る。

遅れて高野、小西、真田さんの順で彼らも振り返った。

そこにはピンクのワンピースみたいな服を着た中年がいた。

頭は禿げかかっており、分厚い眼鏡をかけている。

そして、首から下げているのはペットボトルケースに入ったペットボトルだった。

「これが……よう、せい？」

小西は消え入りそうな声でそれだけ呟いた。

キチガイVS変態妖精

自称妖精は軽やかなステップでその辺りを飛び回っている。

いや、中年のそれは軽やかとは言えない。

僕らは声も出せずに彼のステップを黙って見ていた。

「あのさ………」

真田さんが口を開く。

「………ん？」

「あの人って確か、校長だったと思うんだけど」

「はあ!？」

僕は真田さんの顔を見る。

彼女は狼狽した顔で僕を見返してきた。

確かに僕の頭の中に校長のビジョンは無い。

なのであそこの変態兼妖精が校長だという確証もない。

しかし、真田さんが言うのだから恐らくそうなのだろう。

だが、僕の中の校長は頭が禿げていて眼鏡を掛けていて無口でそれでいてシャツの上から女物の下着が透けているというイメージだ。

ここにいる校長はと言うと………。

案外当てはまるな。

「で、どうすんだよこれから？」

高野が呆れた調子で言う。

「捕まえてやるぜ、つおらああああー!!」

北川はそう言うと校長の方に走り寄って行った。

しかし、校長もそれを黙って見ていた訳ではない。

北川のキレのあるタックルを右腕で後ろへと受け流した。

「うおおおおっ!？」

北川はそのままの勢いで前へ倒れこんだ。

倒れこんだ背中に校長は拳を振るった。

北川は短い悲鳴を上げるとそれっきり動かなくなった。

「・・・・・・・・え？」

北川は動かない。

「いや・・・・・・・・いやいやいやいや・・・・・・・・何この展開」

高野が苦笑しながらそう呟くがやはり北川は動かない。

「さっきまで人が死ぬようなノリじゃなかっただろ！？」
え！？

マジで！？」

高野が声を荒げるがやはり北川は動かない。

困惑している僕らを見下すかの如く颯爽と校長はどこかに走り去っていった。

「ちょ、これどうすんの？」

「えーと………とりあえず永井、お前あいつ追いかける！
てか、足早いなおい！！」

校長は既に僕らの遙か先を走っている。

だが、僕だって陸上部で日々鍛えられたのだ。

奇声を上げながら僕は校長を追いかける。

山道といえどそれは向こうも同じこと。

僕も時折切り株に躓きそうになったりしたが、校長も同じように苦戦しているようだ。

校長の表情に焦りの色が見えるのに比例して僕との距離も詰められる。

ふと脇を見ると、小西も僕とほぼ同じスピードで僕の隣を走っていた。

「小西！？着いてきたのか」

「心配……………だった」

「そうか。」

君も陸上部だったしね。よし、2人で校長を捕まえるぞ！」

「お……お……おーっ」

校長と僕らとの距離はついに10mを切った。

もう少しで手が届く。

そう思い、安堵した時だった。

校長は何の前触れもなく足を止めた。

僕らは既に全速力で走っている。

急に標的が止まった事で僕らは慌て、足を滑らせてしまった。

「まずいー！」

その口に出した時には僕は小西と一緒に仲良く地面を滑っていた。

落ち葉が口の中に入ったのでそれを吐きだし、校長の方を見上げる。

校長は既に右手を後ろに引いて僕を殴る準備が出来ていた。

僕は校長を見上げたままそこから動けなかった。

校長の右拳が僕の腹に入る直前だった。

「このくそハゲがあああ！！」

北川の綺麗な面が校長の後頭部に入った。

北川が持っているのは竹刀ではなくその辺に落ちていたのであろう
太めの木の棒だった。

だが、道具は違っていても北川の面の切れ味には影響はほとんど無
かった。

校長はゆっくりとこちらに倒れこんできた。

僕は横に転がって校長の体をかわす。

校長の体が落ち葉の地面に埋まって行った。

それを尻目に小西が北川に尋ねる。

「死んだ・・・・・・・・んじゃ・・・・・・・・なかつたの・・・・・・・・
か？」

「馬鹿野郎！」

無敵の北川様があんなので死ぬか！

まあ、気絶はさせられたけどな。

真田と高野が起こしてくれたんだ」

まあ、良く考えれば殺すわけないしね。

少し遅れて高野と真田さんも僕らに追いついてきた。

彼らはどこから拾ってきたのか太い頑丈な縄を持っていた。

それで校長を木に縛りつける。

縛り終えたタイミングで校長は目を覚ました。

「む……………ここは？」

「あ、校長先生。大丈夫ですか？」

僕は優しい声色で校長を気遣う。

しかし、返ってきた言葉は予想に反したものだ。た。

「校長？誰の事だ？私は山の妖精ヒノツキーだ」

「いや、もう良いですから校長先生」

「だからヒノツキーだ」

「良いから飲み物何か教えてくださいよ校長先生」

「ヒノツキーだ」

「……………」

面倒なのでそういう事にしておいた。

そして、校長もといヒノツキーに持っていたペットボトルの中身を
教えてもらった。

校長はペットボトルホルダーからペットボトルを出して僕らに見せ
てきた。

「何だ、普通のコココーラじゃねえか」

北川がつまらなそうに言い放つ。

校長が不敵に笑いながらペットボトルのラベルを剥がす。

そこには黒っぽい液体が！！

「ペ○シだ」

「どっちでもいいわ!」

高野が校長の禿げ頭を叩く。

彼のツッコミに上下関係というものはない。

僕は得点表にポイント1の答えとそれを手に入れた時間を記入する。

そのついでに校長からも話を聞いた。

話によるとこの遠足は生徒だけではなく教師陣もかなりはっちゃけるらしく、彼以外にもこういう事をしてくる輩がいるらしい。

校長権限でそれをやめさせると頼んだが、生徒を気絶させる様な人

間がそれを聞き入れるはずもなかった。

それどころかここで起きた不祥事は全て校長が揉み消すというのだから本当にこの学校は色々とおかしい。

ちなみにここの問題をクリアしたのは僕らのチームが1番らしい。

他のチームがこれをクリア出来るとはどうしても思えない。

去り際に校長は僕らを呼び止めた。

「一ついいかね」

「何ですかヒノッキー」

この呼び方は嫌だったが、この呼称じゃないと話をしてくれないのだ。

「君達、もう少し落ち着いた方がよいよ。」

少なくとも教師の頭叩いて昏倒させるのだけはやめた方がよい」

お前が言うなよ。

と、思ったが確かに少し反省しなければ本当に死人が出る勢いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7623v/>

キチガイ達の日常

2011年10月13日14時52分発行